『語用論研究』第 17 号(2015 年) pp. 83-90
© 2015 年　日本語用論学会

［書評論文］

名嶋義直・神田靖子（編）『3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える』

東京：ひつじ書, 2015. pp.xx + 279, ISBN978-4-89476-752-2

林　礼　子
甲南女子大学

1.　はじめに

研究とは知的な反抗の精神によって進められるものである、と言うより、研究とはクリティカルリテラシーによって可能になる、と言った方がよいかもしれない。我々は研究するなかでディスコースの問題に出会い、その解決に向けてカウンターディスコースを構築する作業をしている、そしてまたその作業のなかで、クリティカルリテラシーを培っている。

本書は、3.11 福島原発事故後に流布したテクストの言説分析をとおして、「原発推進イデオロギー」に対抗する「反原発イデオロギー」のカウンターディスコースを提示する書物である。それは、「原発推進イデオロギー」のテクストに「潜む権力性をはじめとした社会諸問題を可視化し、社会に訴える（野呂　本書　p. 54)」テクストとして構成されている。構成は第 1 部と第 2 部からなり、1 部には「官と民のことば」についての論文が 3 点、2 部には「新聞のことば」についての論文が 2 点と語彙調査報告が 1 点収録されている。第 1 部の対象テクストは、電力会社のホームページ上でなされた広報、文部科学省発行の原子力・放射線教育副読本、そして政府関係者の話し言葉による談話である。第 2 部は新聞を対象にしている。方法として、イギリスやドイツで提案された批判的談話分析の理論と枠組みが援用されている。

2.　用語の説明

言葉は現実の出来事を作っている、という認識を持つ研究は、言葉が社会の仕組みや価値観を作るという見解のもとで、言葉の形式、機能、意味は一体であると考えている。この言葉の定義による言葉は分野によって、言語、ナラティブ、ストーリー、ディスコース、テクストなどと呼ばれるが、ここでは本書を書評するにあたって、分析の対象となる

表現形式（語や文及びそれらによって形成される新聞や本、報道など）をテクスト、テクストにおいてその言葉が果たしている機能（一般に言語学で研究される機能的な意味）をテクスト機能、そして特定の価値観、すなわち、原発について語られる場合に構築される意味（批判的談話分析が関心を向けるイデオロギーの側面を持つ意味）を伝えるテクストを、特にディスコースと呼ぶことにする。ディスコースという用語は多様に定義され様々に使われ、例えば形式だけでなく意味機能を指してディスコースと呼ばれることがある。それは、言語はディスコースであるという考えに基づくものであるが、ここでは形式と機能、意味を分けて使うことにする。そしてまた便宜的になるが、批判的談話分析の見解にもとづいて、意味とディスコースの関係を以下のようにする。

テクストには社会の知識や信念、規範からなる価値観が詰まっている。ある特定の価値観が共有されていると思われるテクストを集めて観察すると、共通の価値観が体系化されているのが見えてくる。その体系がイデオロギー（すなわち意味、社会の意味）である。イデオロギーはディスコースによって構築される。例えば、原発直後に繰り返された「放射能は人体に影響を及ぶす数値ではありません。その点については安心してください」（大橋　本書　p. 110 より抜粋）というテクストは、放射能の線量について語るディスコースであり、放射性物質の線量の影響を否定し放射線量を肯定する、というテクスト機能を持つ。批判的談話分析は、このテクストは政治家によって語られたディスコースなので、そこに政治性を持つイデオロギーがあるのではないかと問うのである。

イデオロギーは特定の価値観を持つ知識の体系なので、テクスト作成の規範にされることが多い。またそのイデオロギーのもとで作られたテクストは、そのイデオロギーを生産する働きをする。批判的談話分析は、テクストはその時の社会において優位にある集団の価値観の影響を受けて作られるので、その価値観を理解するにはテクスト分析が必要である、と考えるのである。

対象について語るディスコースのイデオロギーを明らかにする作業は、カウンターディスコースによって達成されるが、その構築は容易でない。特に、特定の集団の利益になるような、そして都合の悪いことは隠蔽するディスコースは「多次元的、多機能的、マルチモーダル」（Hart & Cap 2014）なテクスト構成をしているので、そのようなテクストに対抗するカウンターディスコースは「言語的、間テクスト的、歴史的、社会的、状況の多様な側面のコンテクストとの関連において」（Hart & Cap 2014）、他分野間の連携による横断的な分析によって構築しなければならないからである。しかしそうした横断的分析を以ってしても、カウンターディスコースによるカウンターイデオロギーの構築は達成できるだろうか。異なる分野の分析者がそれぞれに、多様にあるテクストのなかから特定のテクストを選び、それぞれの専門のやり方でアドホックにテクスト分析する、そしてそれをまとめ、体系的に理論化する、ということが可能であろうか。このような問題意識をもって本書を読んだ。

3.　本書のカウンターディスコースを観察分析する試み

本書のカウンターディスコースを理解するには、先に序章と終章（名嶋）を読むのがよい。そこで著者らが「反原発イデオロギー」を構築するに至った理由と目的がわかる。序章では、福島第一原子力発電所の現状が説明されており、(1) 流れ出た放射性物質の処理の問題と (2) 基準値の信頼性と放射性物質による汚染の影響の深刻さがわかる。またさらにここで、(3) 原発再稼働に対する国民の声の事故直後の変化や、(4)「規制基準への適合性審査」の申請をするエネルギー供給者が増加していること、(5) 健康や環境の安全性は保証されているという説明がなされていることもわかる。そして、(3)、(4)、(5) が政治による「原発推進イデオロギー」の強化に利用されているということが理解できる。

終章は、「吉田調書」に関する新聞記事の掲載を時間軸で捉え、その掲載経緯を対象にしたテクスト分析である。ここでは、新聞テクストの作成の背景に新聞社間での購読者獲得競争によって産出されること、そしてそれが「原発推進イデオロギー」を決定し強化していくことが描き出される。ここで、(1) 他社との競争に勝ち抜くために作成される新聞社のテクストが、官である政府と特定の民である識者と電力会社に、原発を推進させる力を与えている、そして、(2) その新聞テクストには利益の追求という価値観の体系がある、ということが明快になる。著者（名嶋）はこの終章を本書のまとめにかわる応用問題として提示しているが、評者はこの終章からある概念を得た。それをもとに、著者らのカウンターディスコースを評者自身のやり方で理論化することにする。

3.1.　官と民のカテゴリー化

評者が終章から引き出したのはカテゴリー化の概念である。本書は原発推進イデオロギーの流布を示すのに「官」と「民」を対立項目に置いて論じているので、評者はこの二者を対立させる著者らのカウンターイデオロギーを評者自身が観察し再構築することにした。そこで、評者は次のようなアプローチをとることにする。

構築主義の言語の分析研究では、この理論にもとづいてとか、この理論の観点では、といった分析や説明の仕方をしない。我々の知識や規範は「構築される」という考えのもとで、その構築の過程を明らかにすることを目指す。例えば、官と民の二項対立は元からあるのではなく、「つくられる」と考える。したがって、原発推進・反対という 2 つのイデオロギーの対立は、官と民の対立概念が原因なのではなく、官や一部の民がテクストにおいてその対立概念を構築する、と捉える。すなわちこのテクストは、官の地位にいる人によって書かれているから、話されているから、原発推進のテクストである、あるいは、官のテクストであるという論法でテクストを特徴づけるのではなく、テクストの作者はテクスト作成の行為において原発推進のイデオロギーをどのように認識し、志向し、利用するのか、という視点を持った分析の仕方をする。すなわちそれは、官や民はテクスト作成と

いう行為において自身をどのように描き出しているのかを観察分析するという手法である。例えば、民である電力会社や一部の新聞社は官と同じように原発推進イデオロギーを実践している（高木、神田、名嶋（終章））。しかしそれは、彼らが電力供給や報道をする人びとだから、あるいは、官と同じ原発推進者だから、彼らは官と同じカテゴリーグループの成員である、という論法によって示すことはできない。なぜなら、彼らはテクストにおいて自身が官と同じカテゴリーの成員であると表明していないからである。では彼らの原発推進イデオロギーはどのようにテクストで表出されているのかというと、それは、テクストの作り方において彼らが当然のことのようにカテゴリー化する行為に表出されている。我々はその事実を客観的に示しながら説得する必要があるのである。

3.2. イデオロギーはカテゴリーと結びつく過程で構築される

電力会社や新聞社は民である。このカテゴリーは固定しているが、彼らはテクストを作成する行為のなかで、あるいは作成するやり仕方において、原発を推進する民として自身をカテゴリー化する。そのやり方はどのようなものかというと、例えば、電力会社が原発事故後に行ったプレスリリース（高木）においては、民である電力会社は被害者であり電力不足に直面している他の民と同じカテゴリーグループの一員であると位置づける、そしてその一方で、原発の再稼働の必要性を説く民のカテゴリーグループの一員であると位置づける、というやり方である。すなわち、「原発推進イデオロギー」が後者のカテゴリー化の活動との結びつきのなかで構築されるのである。

民である新聞社のカテゴリー化をみると、この概念活動が我々の日常の知識と結びついていることを描き出すことができる。読売新聞と朝日新聞が原発事故前後の原発関連の記事（テクスト）を作成する行為は、(1) 語の選択を変える（庵）、(2) 読売新聞が原発に賛成し社説を支持する投稿を選択する（神田）、そして、(3) 上で見た読売新聞と産経新聞が朝日新聞を批判する（名嶋）行為を分析した論文においてそれぞれ報告されている。これらの報告によって、読売新聞がこうした行為において、自身の立場や意見が朝日新聞と異なることを、つまり、朝日新聞と対立の関係を築いていることがわかる。一般に新聞社は、「報道する」「読者の声を吸い上げる」「批判の精神を持つ」といったカテゴリー活動をしている。対立の正当性は、読売新聞がこれらの活動に言語の選択や投稿を選ぶという行為を結びつける過程でつくられるのである。読者は、読売新聞のそうした方法において、つまりその対立を体系づけるやり方に読売新聞の論理性や規則性を見いだす時、その対立の正当性（すなわち、読売新聞の「原発推進のイデオロギー」）を受け入れるのである。

官が原発推進者として自身をカテゴリー化する方法は、文部科学省と経済産業省が小学生向けに出版した原子力・放射線教育副読本の奥付（野呂）に表出されている。著者によると、これらの副読本は 2011 年 3 月の福島原発事故の前後に続けて発行された。1 冊目が事故の約 1 年前に、2 冊目が事故後約 7 ヶ月（2011 年 10 月）に、そして 3 冊目がその

後 2 年半ほど（2014 年 10 月）で再発行された。一般に、官は「知識を提供する」「教育をする」といったカテゴリー活動をする。副読本はこの活動の一貫として発行される。一方小学生は「学ぶ」カテゴリー活動をし、その活動のなかでこの副読本を読む。一般に、「小学校」とこの 2 つのカテゴリー集合と活動の概念は結びついている。したがって多くの小学生は、官によって提供されたテクストを学ぶ活動を常識的な活動であると認識している。小学生が官の「原発推進イデオロギー」を受け入れるとすれば、そこには 2 つの点が考えられる。1 つは、副読本が官のテクストだからではなく、多くの小学生が小学校とこれらの 2 つの概念と活動が結びつくことを理解しているからなのである。もう 1 つは、著者（野呂）が指摘する批判力の点である。学校で「学ぶ」活動には「知識を得る」活動だけでなく、「考える」「判断する」といったカテゴリー活動もある。小学生が官によって限定された知識をもとに「原発推進イデオロギー」を受け入れるとすれば、それは、その小学生が「学ぶ」活動が「考える」「判断する」活動と結びつくという知識を持たないからである。

民の代表である政府（当時は民主党の官房長官や首相）が官（経済産業省）のスポークスマンとして原発事故直後に官の見解を伝えるテクスト（大橋）では、官と民の位置づけと言語イデオロギーが結びつけられる。このスポークスマンの報道における敬語や丁寧語の使用は、彼が言語イデオロギーに志向していることを表わす。また使用の組織化は、その政治家が官と民の両方のカテゴリー集合に属すことを示す方法でもある。報道のもとで官の言葉を聞く側の民はこうした言語イデオロギーにもとづいた規則性から、その政治家の報道が官のカテゴリーの帰属においてなされていることを認識する。しかしその一方で、民はその官の言葉が自分たちと同じカテゴリーグループの代表によって語られているという認識も持つのである。

3.3. 言葉の多義性を閉じ込める作業から開く作業へ

本書の「まえがき」に、「本書の読者の対象は一般の人びと、大学の学生、そして日本語を学ぶ人びとと定めている、これらの人びとがクリティカルリテラシーを獲得する手助けになることを目的とする」とある。この方法のもとで、著者らは、批判的談話分析の分野を紹介し、Fairclough、van Dijk、Wodak 等が提示した批判的談話分析のキーワードとアプローチを説明する。そして次に、その分析モデルをもとに事例分析を行い、そのモデルの有効性を示すという構成をする。また同時に本書は語用論の紹介も兼ねている、とある。この目的のもとで、著者らは語用論に依拠した語や表現の意味機能、意図の産出と解釈の分析の試案を提示する。これは「はじめに」で書かれた目的に沿った構成である。この構成に従って読み進め、実例にあたることで、読者は新聞や報道の言葉はディスコース現象であり、新聞や報道はディスコースによってイデオロギーを作りだす、ということを理解する。しかし本書の本来の目的は、カウンターディスコースによって「原発推進イデ

オロギー」に対抗する「反原発推進イデオロギー」を構築することである。つまり本書は、カウンターリテラシーによる啓蒙、言語分析のトレーニング、そして研究の成果の報告という 3 つの目的を持っているのである。その点を理解したうえで、本書の実例分析の仕方をやや詳しく見ていく。

まず、「原発推進イデオロギー」のテクスト構成についてである。各章の導入部で、読者に向けて理論についての概論があり、後の分析と議論の枠組みが示される。ここで読者は章全体の輪郭を理解する。しかしこの部分で躓くと、次の実例分析で迷うことになる。評者の知識と理解力のなさによるところが多いが、それでもやはり、理論と実例分析の関連がすっきりと整理できなかった章もある。例えば歴史的アプローチの章（pp. 157–198）では、新聞分析に入る前にこのアプローチの詳しい説明が図や表によってなされる。そして、次に日本の原発の歴史と背景の概説がある。この説明と概説で評者はビッグワードに出会う。例えばディスコースを「同時にそして連鎖的にたがいに関連し合う言語的行為の複雑な束」、テクストを「物質的に大衆性のある言語的行為の産物」とそれぞれ英語からの翻訳がある。続いてその説明があるが、この定義はわかりにくい。次に、読者はこの導入で得た知識をもとに、「歴史的経緯から、原発推進を主張する読売新聞」（p. 167）が選んだ投稿を実際に分析することになる。評者は、導入部と実例分析のつながりを理解できなかった。投稿者が使っている語や表現の前提が、導入部で挙げられた図や表の項目や内容と、どのように関連しているのかが明示されていないからだろう。著者は読者がその関連に気づくことを期待しているのかもしれないが、評者は自身でそれを見つけることができず、結果的にテクスト事例をトポスの事例（トポスについてもわかりやすい説明があるとよい）と見なせる根拠を見いだすことはできなかった。また、専門用語が過度に一般化されていることも行き詰まる原因となった。例えば「大きな一歩」（p. 181）や「総動員」（p. 184）はメタファーである、と説明されているが、これらの表現が何と何の概念知識と関連づけられているのかについての説明が欲しかった。また、これらの言葉がメタファーによってなぜ「普段は活動していない休止状態にあるものを呼び出し働かせる」と解釈できるのかについての説明も必要である。

つぎに、本書がとる批判の仕方についてである。本書で使われた言語分析の方法は、テクスト内の特定の語や表現を対象にして、それらの言語的意味（機能）を定義し、それに解釈を与えるというものである。この作業は広い意味でのコーディングである。コーディングは計量的分析や一部の質的分析において使われる手法であるが、分析者の判断と解釈が入るという点で問題が残る。分析者の評価を排除できないからである。例えば、「（定期検査中の敦賀発電所の）2 号機からの受電が受けられないこと等を考慮すると、」（p. 28）の「受けられない」の否定（下線部は評者による）を指して、「この否定形によって、敦賀発電所 2 号機からの受電は本来得られるべきだという命題の前提が示されている。このように関西電力の原発停止による影響と敦賀発電所 2 号機からの受電が当然しされ、原

発を重要だと考えている主張がイデオロギーとして暗に伝えられている。」と分析されている。しかし、このテクストにおける「（今は）受けられない」という表現には「これまでは受けられた」という字義的な命題はあるが、この否定には「本来得られるべきだ」という命題もその前提もない。またそこから、つまり仮にその命題の前提があることにしたとしても、この否定形において、電力会社が敦賀発電所 2 号機からの「受電を当然視する」、「原発を重要だと考えている」、そして「それをイデオロギーとして暗に伝えられている」という解釈を論理的に引き出すことはできないだろう。この論法の論拠は導入の背景と分析の経緯で示されており、そこから推測できるということであれば、それを可能にする緻密な言語分析に裏づけされた論述が必要であろう。

自身の個人的な解釈を回避するために分析者は、既成の理論や概念を分析の道具にするアプローチをとることがある。しかしこの方法においても、分析者は分析の過程でその理論や概念を再生産する行為をすることになる。例えば、原発推進イデオロギーと言語イデオロギーとの関係を描いた論文（pp. 101–136）は、コーディングに敬語やわきまえという概念を持ち込むことで、これらの言語イデオロギーや文化イデオロギーを著者自身のカウンターディスコースにおいて再生産することになってしまうのである。

コーディングは証拠を示す方法として効率がよいという点はある。しかし失うものも大きい。この作業は、そこで本当に使われている言葉の意味・機能を分析者の目的に向けて使われた特定の概念や特定の意味のなかに閉じ込めてしまうからである。失うものはそれだけではない。再生産は読者を説得することができない危険性がある。

しかし副読本の奥付の分析（pp. 53–100）では、コーディングによって意味を解放する作業がなされている。著者はテクストを分析ガイドラインに沿って丹念に観察分析する。それは、ガイドラインを道具にしたテクスト分析ではなく、分析の過程で既成のガイドラインを見直していく作業においてなされている。著者は、背景と枠組みの部で紹介された副読本の発行元、文部科学省の組織図、学習指導要領と副読本の役割を関連づけながら、対象テクスト内に隠された意味を著者自身の言葉で描き出す。読者はその過程で隠された意味が何なのかを知ることになる。そしてさらに、読者はこのコーディングの作業に加わることによってこのガイドラインにない「原発推進イデオロギー」の言葉を自身で見つけていくことになる。

4.　おわりに

短い時間の制約のなかで書評することになった。そこで、限られた時間で一つひとつの論文を論考するかわりに、本書のカウンターディスコースの構築の仕方を観察することにした。そしてその過程で評者が得た考えを評者の言葉で言語化する、そして疑問に思った点について触れる、ということにした。

改めて言うまでもなく、批判的談話分析が課題とする「言語によって構築される社会的意味とその受け手への影響」は語用論研究においても研究課題の一つである。言葉の社会的側面を研究する語用論は、流布する社会のイデオロギー、すなわち、政治性、そして「意味」というものが、多様なジャンルとコンテクストと言葉が相互作用するなかで構築されていくことをこれまでも示してきた。しかし語用論研究に限らず言語に関わる研究は、そうした言葉の側面を人々に伝える責任も担っている。本書はその責任を果たす目的で書かれた。

最近、既成の用語、枠組み、理論では捉えきれない現象に立ち向かう研究者が増えつつある。そうした研究者は、既成の方法によるのではなく、自身が立ちあげた方法でしか明らかにできない方法を探る姿勢を持っている。実際、この姿勢は今や確実に言語研究のあり方を変えつつある。

参考文献

Hart, C. and P. Cap. 2014. “Introduction”, In C. Hart and P. Cap (eds.), *Contemporary Critical Discourse Studies*, 1–15. London: Bloomsbury.

Hayashi, R. 1997. “Hierarchical Interdependence Expressed through Conversational Styles in Japanese Magazine” *Discourse and Society*, 8–3, 359–389.

林礼子. 2003.「批判的談話分析」『応用言語学事典』、318–321. 東京：研究社.

Hayashi, R. 2016. “Categorization in Talk: A Case Study of Taxonomies and Social Meaning” *Pragmatics*, 26–2.（掲載予定）

林礼子.「列挙と分類のエスノ意味論」『講座　言語研究の革新と継承』 東京：ひつじ書房.（出版予定）

串田秀也. 2015.「書評：「植田栄子『診療場面における患者と医師のコミュニケーション分析』」、『社会言語科学』17、90–92.

Tollefson, J. W. 2014. “The Discursive Reproduction of Technoscience and Japanese National Identity in *The Daily Yomiuri* Coverage of the Fukushima Nuclear Disaster” *Discourse & Communication*, 8–3, 299–317.